

世界地理学の発達と蘭学者の対外認識 —大槻玄沢の北方研究を中心に—

王一兵（東北大学院）

【要旨】

18世紀後半の日本には、それまで併存した世界に対する認識を概観すると、仏教系の三国観と、中国の伝統的な地理的知識、または在中イエズス会士によってもたらされた西洋地理学に加えて、オランダ経由のヨーロッパの地理的知識が、それを根底に支えている。そして、西洋諸国の海外進出と関連して、日本では世界地理学に関する独自の研究が促進され、とりわけ北方地理空間の究明に大きな展開を見せた。これらの研究活動の中心的担い手が蘭学者であることは、蘭学の有用性が公認されるようになったという事実裏づけられている。

19世紀に入ると、ロシアをはじめとする西洋諸国が日本へ接近し、深刻な対外的危機をもたらした。そのなかで蘭学者は、どのように世界地理学を生かして外圧に対応しようとしたのか、また、新しい地理学的知識を摂取する過程において、従来の自国観や世界観はどのように変容したのかについて、蘭学者大槻玄沢を中心に検討したい。最後に、世界地理学の進展にともなって現れた実学的精神にも触れることにする。

1、18世紀における蘭学者の世界観

本稿の中心人物である大槻玄沢（宝暦7-文政10、1757-1827）は、地元の仙台藩医建部清庵について南蛮流外科を学び、のちに江戸で杉田玄白、前野良沢に入門し蘭医学を、さらに長崎遊学中に通詞吉雄耕牛、本木良永にオランダ語を修行した。天明6年（1786）に、ついに江戸で蘭学塾・芝蘭堂を開き、蘭学の教育と普及に大いに貢献した。玄沢の世界観について、彼が初めて編訳した西洋博物誌『六物新誌』（天明元、1781）において地球が漢字表記の六大洲に分けられ、現今にいうアジア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカのほか、墨瓦蠟泥加洲^{メカニカ}という仮説上の大陸が記されている。そして、いわゆる「西洋」は漢＝中国の西に位置するアフリカ、ヨーロッパの諸国を指すとある。かかる世界観は、中国に滞在するイエズス会士マテオ・リッチ（利瑪竇、1552~1610）が作成した世界図『坤輿万国全図』（明1602、以下『全図』と略す）を想起させる。『全図』は、はじめて世界を五大洲、つまり亜細亞洲・欧羅巴洲・利未亜・南北亜墨利加洲・墨瓦蠟泥加洲と分け示すものであり、日本人における三国世界像を転換する上で大きな影響を及ぼしたのである。

玄沢に師事した芝蘭堂の地理学者であり山村才助の『訂正四十二国人物図説』（享和元、1801）にみる玄沢からの附言において、世界＝「混地四大洲」の計 41 都が記されており、すなわち亜細亜（22 都）・亜弗利加（4 都）・欧羅巴（10 都）・南亜墨利加（4 都）・北亜墨利加（1 都）となる。これらの記載は、当時の蘭学系知識人における世界地理学知識の集成であると考えられる。内容の分量上、四大洲のうちアジアに関する記載が圧倒的に多い反面、他洲についての知識がまだ不十分であると考えられる。また、20 年前の『六物新誌』にみられる未知の南方大陸が外されているところから、新しい世界観が修正されつつあったことが分かる。さらに玄沢の附言には、日本に対する地理的認識が集中的に述べられており、以下引用する。

日本ハ東辺之一方ニ僻在ストイヘドモ、氣候常和、土壤肥腴、衣冠文物服飾制度、彼諸州ノ寒暄、宜キヲ異ニスルモノニ優レルコト遠シ。吾人此間ニ生レ、平居安逸ニシテ、衆ト共ニ其楽ヲ同フスルコトヲ觀感ス。²（句読点は筆者、下同）

ここから、玄沢は世界各国の気候、土壤、衣冠文物、服飾制度などの相違を認識するうえで、東にある日本が暮らしやすい国であると考えている。その詳しい理由として、文章の続きには、

夫五方之地、寒熱異宜、風土不齊……独我邦位于東方日出之域、皇統一系、万古不易。天經之所在、三十度而四十度。氣候和適、春秋四時、不失其序、腴地沃壤、五穀豐饒、山林茂盛、五金厚富、四面環海、魚宴充切。……較之南北諸邦、其間豈啻霄壤、實に天下樂国也。³

とみられるように、玄沢は日本が「東方日出之域」にある「万世一系」の国であると唱え、しかもその位置、気候、物産など地理的状況を把握したうえで、自国日本の優位性を主張している。この時期に、中国の華夷思想に基づく天下一統の世界観が崩壊される途上にあるが、玄沢のなかで日本が優れた国であるというエスノセントリズムが存在することは明瞭である。

この時期に、玄沢ら蘭学系知識人は地球体説と西洋の世界図を受容し、新しい世界観が構築されはじめたことが窺える。それについて、彼が蘭学入門書『蘭学階梯』（天明 3、1783）のなかで、

輿地一大毯、万国配居、皆ナ其中ニシテ自ラ区域ヲ分チタルコトナレドモ、我ガ居ル所ヲ自ラ尊称シテ、支那ハ中土・中原、中華・中国、或ハ華洛・神州ト云ヒ、和蘭は本国入爾瑪泥亜ト呼テ、「ミツテルランド」（此翻_中土_）ト称シ、我邦ハ「ナカツクニ」ト唱へ、諸厄利亞ハ其都邑ヲ以テ度ノ初メトスルノ類、本国ヲ称スルトキハ左モアルベキコトナリ。坤輿方域ノ大ヲ以テ謂フトキハ、亜弗利加ノ属、阨入多ノ地方コソ世界ノ中央トモテフベシ。支那・日本ノ分野ハ東隅ニアリ、和蘭等ノ諸国ハ西北ニ在ルノ地ナリ。然ルニ、吾方ヨリ支那ノ教称ヲ以テ中華ノ国ト唱へ、華人・華舶・華

物ナド、称スルハ、何ノイワレナルゾヤ。⁴

と述べたように、中国や日本、和蘭、イギリス諸国では自国を世界の中心と称する習わしがみられるが、地球体説が成り立った以上、絶対的な中心地はそもそも存在しないし、これまで中国を中華と呼ぶのは大きな間違いであると考えられる。玄沢のこのような発言は、中国に対するものではなく、中国を中心とする中華思想そのものに対する非難である。

かかる世界観の変容はまた、中国伝統的学問の狭隘性への批判と、西洋学問のもつ優位性への認識を深めた。そこで、西洋学術を摂取する媒体である蘭書に立ち向かう蘭学者たちが当然、先頭に立つことになる。この点については、前田氏が指摘されたように、蘭学者は「華夷観念の独善的なエスノセントリズムを克服するうえで、有利な立場にいた。その利点とは蘭学者が依拠するオランダ地理書そのものに起因する」⁵とある。すなわち、蘭学者は蘭書による新しい世界地理学の知識を生かして、中国を文明の中心とする中華思想の束縛から抜け出そうとしたのである。玄沢は漢、蘭書籍について、「西洋地方の事は、漢土幾百まきの諸編にても考究しがたし。幸ひに年来御免許渡来の和蘭もあれば、其人に依り、其書に因て、海外諸国の大略は心得させ玉ふは治道の一要事たるべし。」⁶と述べ、漢書において西洋に関する情報は非常に限られており、対外研究にはほとんど役立たないのに対し、オランダ人や蘭書の輸入によって世界各国の大略を知ることができると主張する。これは蘭学の有用性をアピールする蘭学者なりの発言と思われるが、当時の情勢に適した見解でもあることは否めない。

18世紀末期から19世紀にかけて、北辺からロシアが頻繁に進出し、日本人に深刻な対外的危機感をもたらした。対外防衛のために、蘭学者たちは蘭書を通じて、激変する国際的情勢を読み解くことに務めたのである。このような歴史背景と関連して、玄沢自身の学問的関心は、海外事情研究に重点を置くように転回をみせると同時に、本格的に世界地理学に携えることになった。次節では、海防に備えた玄沢の世界地理研究の展開を検討してみたい。

2、ロシアの接近と北方地理空間の究明

文化元年（1804）日本との通商を求めるロシアの使節レザノフは、漂流民を連れて日本へ来航した。日本側に「鎖国」を理由に拒否されレザノフの部下は、武力を用いて日本の北辺に攪乱した。かかるロシアとの交渉や紛争によって、北方地理空間の究明は対外防衛上の急務となる。

漂流民の見聞聴取に命じられた玄沢は、漂流民たちの語りを整理して、40数日間でロシア国地誌たる『環海異聞』（文化2、1805、以下『異聞』と略す）を完成し、藩に提出している。この報告書は、幕府の若年寄である堀田正敦が蝦夷地巡視へ赴いた際に仙台藩から貸し出され、ロシアの対応に備えて読まれていたことが知られる。「彼風土俗尚等、淹滞

経歴等之詳細を究問せしめ」を中心とする『異聞』に対し、「法教並に居残りし者共の所由を詰問し」「侯家常に彼の北辺の異俗を識得するの一考に備へんとす」ことを目的としてまとめられた『北辺探事』（文化 3、1806、以下『探事』と略す）と名づけられた秘録が残されている。このように、海外事情の調査をきっかけに、玄沢はロシアの動向に注意をはらい、日露両国の地理的関係を解明する課題に取り組んだのである。

第一は、従来の世界観を打破し、人々に世界地理学の重要性を思い知らせることであると考へた玄沢は、『異聞』の「序例附言」において、「我方の人、多くは唐、朝鮮、天竺などいふ名のみ」を聞知し、「海外四辺別に許多の諸大洲国土有て、列居する事」を全く知らないとし非難している。このような現状とも関連して、玄沢は初めて世界一周した漂流民らの航海経路図を漂流記に添付している（図1）。この航海図において、世界の五大洲の分布と赤道との相対的位置関係が明示されているほか、亜細亜・カムシヤツカといった地域が2箇所描かれていることについて、「地球を平面せる故」という説明文を加えられたのである。

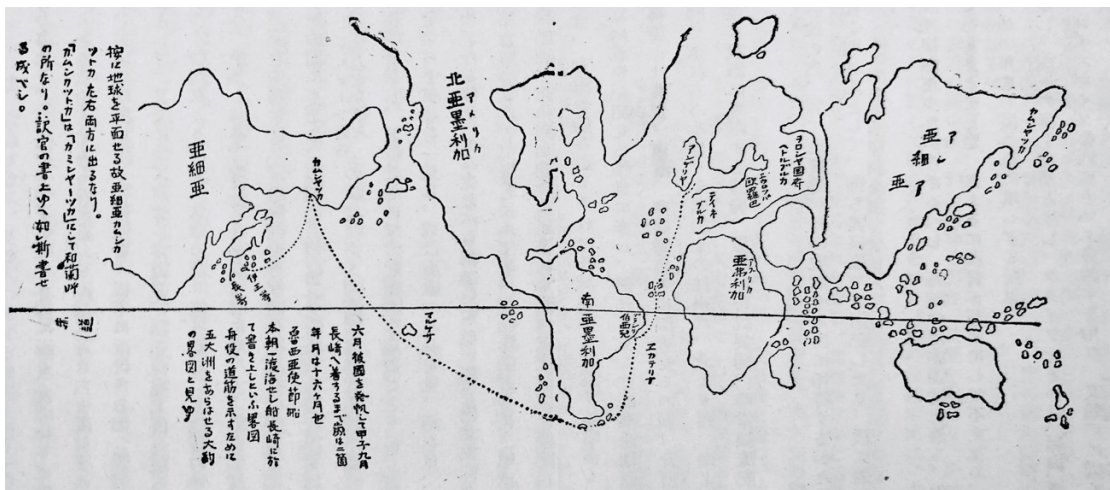


図1 ロシア漂流民世界一周航路（大槻『環海異聞』より）

また、この航海図に描かれたロシアの来航路線は、オランダのそれと異なり「カムサスカ」を通過していることに疑問を抱いた玄沢は、窮理の念に駆けられ、門弟の山村才助に論証を求めた⁷。そこで地理学の才能をもつ才助はロシアの航路について詳しい説明に加え、「カムサスカ」はロシアの領地であり日本に近い所にあるため、「カムサスカ」を通過するのは渡海の安全性と薪水補給の利便性を考慮すれば妥当な選択であるという。日本人はこのような経路を不思議がるのは、「カムサスカ」と日本とは甚だ通ひがたき遠路」であるという思い込みであり、しかしロシア人からみれば「船路明白なれば敢て遠路難事などとは思ふまじきことなり」という才助の議論に注意すべきであろう。要するに、日露両

国の考え方は大いに異なることに注意すべきである。以上のような問答は、ロシアが日本の近辺まで接した事実の確認と、今後ロシアの来航経路を想定するための重要な根拠だけでなく、さらに以降の対露政策の制定に示唆するものであると評価されよう。

日本人の狭隘な世界観と地理学知識の乏しさを指摘する上で、玄沢は外寇に備えるために、世界地理学を活用した解決策を提示している。『捕影問答』(文化4、1807)において、
何れも我国ハ四面に海を受たる地なれハ、外寇に備ふること第一たるべし、昔なしとて今もなしといふべからず、図らずして魯西亜隣境となるの類なり、人宜しく是迄渡りある所の和蘭の書によりて、万国異邦の地理・方位・遠近と各国の治乱興敗・兵威の強弱盛衰、古今の異同あるの類をもあらかじめ知りて、不慮を待たば時に臨んで狼狽する事なかるべきか、昇平日久しく士民安逸に日を消したれハ、今聊か魯西亜の外寇あるも却て我民を養ふ菓餌たるべし、是兵を練り武を請するの時とやいふへき。⁸
とみられるように、西洋渡来された蘭書を窓口として、世界各国の地理的情報を得るのみならず、それらの政治状況や、軍事力、古今の異同まで知ることが必要であると提言している。これは玄沢が海国日本の地理的特徴とロシアの国土拡張とともに把握した上の見解である。

北門の防衛という緊急課題に迫られ、玄沢は日露両国の辺境にわたる千島諸島(「チェブカ諸島」ともいう)の地理空間に焦点を当てることにした。この未開の地は北方政策の制定に関わるカギとして、多くの探検家や地理学者の関心を集めていた⁹。千島の地理研究にあたって、玄沢は漂民から得た見聞のほか、蝦夷地に渡った幕吏による実地調査を主な情報源としている。

日本では昔より千島に36島或いは37島あると伝わっていた。たとえば、玄沢と同藩で、北方問題の警鐘を鳴らした林子平は、かつて千島の地理空間について、「千島に37島ありといふ。蝦夷の本地と通ずるもの僅か二つ。曰「クナシリ」曰「エトロフ」なり。此三十七島を過ぎ東に国あり。加摸西葛杜加といふ。これ韃靼よりの地続きにて、蝦夷国を取り巻いて東へ伸びたる遠地なり。」と説く。この内容は、玄沢が『探事』に「林氏蝦夷紀事抄録」と名づけた一節に引用されている¹⁰。その続きに「三十七島実は其大なるもの廿一島なり」と書き加えたところから、玄沢は旧説による千島37島よりも、そのなかにある大きい島の21島に関心を抱いていることがわかる。この21島という情報は、漂流民らの話によると考えられる。漂民の叙述から「彼人の説に口蝦夷地迄「カミシヤーツカ」より廿一島有り。第十八目にあたる島迄は彼所領となせり」¹¹と聞かれる。

ロシアの南下拡張を明らかにするために、玄沢は『探事』において、幕吏最上徳内『赤人間答』(文化4、1807)や近藤重蔵『辺要分界図考』(文化元、1804)を参照に、この第18番島の正体を追究した。調査の結果、北の「カムシヤツケ」より南の「エトロフ」まで、計21島が数えられ、諸島の蝦夷名とそれにマッチしたロシアによる改名とその意味も解

明されるに至ったのである。なぜロシアは諸島を改名したのかについて、玄沢は「島の改名を考ふるに別に意義なく、島の員数の番付なり」といい、南下政策の便宜上に改名しているとみられる。そしてエトロフ島の改名は、18を意味するロシア語「オオセムナツサイ」であった。これらの諸島は「全く日本属島と見ゆるに、彼より十八目まで蚕食せられしは遺恨といふべし」とあるように、玄沢は日本の諸島がこれほどロシアに占領されたことに対し驚異と残念な思いが伝わる。したがって、日本に厳重な警戒を促すために、『探事』のなかでロシアの領土拡張について、

彼本国は元と欧羅巴の西北にあつて、我国よりは海を隔てて数万里の地なり。支那の地よりも山川を隔て、数千里の北隅なりしを、今韃地を併有し、所属となし、国界の碑を立てし所より僅に数十里を経ることと聞え、彼より南に向ひても如レ斯也。(中略) 蝦夷地「ニシベツ」より「カミシヤーツカ」迄直径三百里程、江府よりは七百里前後あるべしと、地理測量家の説を聞けり。彼人世界を航海すること、其邦内の内海を渡るの気性なれば、我海辺に船を来すは尋常容易の事なるべし。¹²

と見られるように、本来数万里を隔てるロシアは、猛烈な勢いで南下しつづけ、いつの間にか日本の近隣まで迫ってきている。ロシア領カムチャツカ半島より日本へ渡るのはわずか数百里の距離で、むしろ「尋常容易の事」とみられる。このように、ロシアの拡張・接近について具体的な情報を提示することによって、人々の対外的危機意識を喚起させ、「我国に於ては近隣界に彼国ある」という現実即して防御すべきであると戒めている。

3、地理学研究における蘭学者の窮理

19世紀にそれまでにない地理学的知識の充実にともない、蘭学者は和漢の古い地図よりも西洋の航海による正確な知識を求めようになった。吉田氏はかつて、実学の主要な二つの特徴を、実証性と有用性としてまとめ、有名な蘭学者にみられる「実測」「実験」「実理」「窮理」「実用」「実学」など用例の考察を行われた¹³。地理学の分野に限定してみれば、「実測」や「実験」がそのキーワードになるであろう。以下は、地理学における実学思想の用例を挙げ、検討を加えてみたい。ただし、直接これらのことばを使わなくとも、意味的に主張される場合には注意しなければならない。

玄沢は『蘭訳梯航』（文化13、1816）において、従来の和漢の地理書や地図にならうのでなく、西洋の地理学知識を吸収すべきであるとする。その理由について、

又輿地学ノ如キハ、彼人四海ヲ航シテ、全地総界ヲ四大洲ニ分チ、其每一洲数百ノ国ヲ容ル、モノ、各洲毎ニコレヲ詳究シテ、図説ヲ作り。古今精ニ加ヘシモノ、本邦唐山ニ将来スルモノ多シ、其説ノ如キハ、両地ニ於テ略訳スル者アリ。職方外紀、増記采覧異言等ナリ。コノ約説ヲ見ルガ如キモ、始テ其方位遠近、土地ノ寒暄、治乱興敗、政治ノ得失、坐ニシテコレヲ知ルニ至リシハ、皆彼ニ依レルナリ。和漢ノ人ニ在テハ

遠洋航海ノコト絶テナキナレバ、固ヨリ企テ及ザル所ナリ。東方諸国ノ人、恒ニコレ
ヲ知ラバ、必ス辺要海備ノ要アルベシ。漸ク其全書ヲ読ムベキノ道モ開ケタレバ、未
ダ漢人知ラザル所モ、追年我方ニ在テ分明ニ得ルコトアルベシ。¹⁴

と明言している。つまり、西洋人は実際に航海して地球上四大洲、数百の国（地域）を詳しく講究して図説を作り上げる。これらの成果はまた日本と中国において翻訳されることを述べている。例に上げられた『職方外紀』や『増訳采覧異言』によって初めて日本に伝えられた世界地理学的知識は、旧有の狭隘な世界観を打破する助力となったことは贅言を要しない。一方、東方和漢の人々は西洋人と異なり、遠洋を航海することがないため、これらの知識を知らずにいることを指摘し、辺要の防備には必ず航海の実験から得られた西洋から地理学を学ぶべきであると論じている。

時に、幕府は対外的危機に対処するために世界地理の究明に迫られ、天文方において蘭書を利用して世界地図の作製が行われていた。玄沢ら蘭学者と学問的つながりをもつ天文方高橋景保は、玄沢と同様に実験重視のような記述がみられる。たとえば蝦夷地の地理調査書『北夷考』（文化5、1808）において、

我国及び漢土の人は、四方航海を事とせされは、行て実験することなく、且測量の法古より詳ならず。…故に天文地理に於ては、漢土に従うは迂にして且荒唐なり。西洋に従うは直に其原を得るにあらずや。爰に是を付して予か意を明かす。¹⁵

と述べたように、和漢の人は航海を通じて実験をせず、測量の方法も古いのに対し、西洋人は四方航海して実地測量を行うゆえ、確かな地理情報を入手しえるのである。これらの記述から、該当期の蘭学系知識人が重要視するのは実践に基づいた信憑性のある知識であり、これこそ、和漢の伝統知識に対する西洋学問の優位性であると広く認識されていたことが分かる。

他方、世界地理学の受容過程において、既存の成果を常に訂正・更新する作業に、蘭学者の実学的精神が窺える。一つは、多くの地理学書が新しい情報に基づいて再編纂されることが挙げられる。たとえば、享和5年（1720）に刊行された西川如見の『四十二国人物図説』は、ヨーロッパの原典を写したものによっており、この『図説』はさらに享和元年（1801）に玄沢の弟子山村才助によって再編され、『訂正四十二国人物図説』となる。玄沢によれば、「原図列する所前後錯雑をなし毎四大洲の属国の次第及其属島等の序を分かたず今新たに其大洲各国其属する所を此に分つて其方位を知らしむる」とあるように、以前の『図説』にみられた錯雑を修正することによって、各大洲、国の地理方位が明白に示されるようになったのである。

もう一つ、知識が正しく伝えられているかどうか、かつ最新に訂正されているかどうかにかんして、細心の注意が払われたことである。たとえば、において玄沢が訳業を務めるにあたって、「和蘭学未熟、其所翻者、誤解顧必多。且漢学膚浅、文辞鄙俚、其所訳者、又

必渋語難通矣、後之識者幸訂正一焉。」(句読点は筆者)と述べたように、語学上の未熟や表現より生じる翻訳上のミスは、誤った知識として伝播されるため、後世の知識人に訂正を願ったわけである。他の蘭学者による訳著書においても、類似した表現が多々見られる。かかる心構えは、蘭学者の実学的精神のそのものではなかろうか。

結び

以上、本稿は18世紀末期から19世紀前期にかけて、蘭学者は世界地理学の発達にともなう対外認識の変容について、蘭学者大槻玄沢を中心に検討を試みた。

まず、蘭学者はアジアに限られた狭隘な世界観から世界全地へ拡大し、地球上に分布する各大洲、各国に関する知識を充実させていくなかで、中華思想から次第に脱却しようとする傾向および新しい世界観が構築されはじめたことをめぐって考察した。また、ロシアなど西洋諸国による対外的危機が深化されるなかで、蘭学者たちは蘭書を通じて世界地理学、とりわけ千島諸島を中心とした北方地理空間を明らかにした。これは、ロシアの拡張・接近状況を把握する上で重要な成果にのみならず、近世日本の海防整備および北方政策の制定に少なからぬ影響を及ぼした。その過程において、蘭学者の対外認識も次第に国際情勢に即したものと変化したことが窺える。最後に、新しい地理学知識を摂取する過程に現れた蘭学者の実学的精神は、彼らが窮理の念に駆けられ、常に新しい情報に基づいて既存成果に対する訂正や更新に臨む姿勢からみることができる。本稿では玄沢の北方研究におけるもう一つの側面である宗教について触れることができなかったが、今後の課題としたい。

注

- ¹ 古くから南極を中心として南半球の大部分を占めると推測された未知の南方大陸であり、日本では17世紀より広く伝わった。
- ² 山村才助『訂正四十二国人物図説』大槻附言、早稲田大学図書館蔵。
- ³ 同上。
- ⁴ 大槻玄沢著、松村明校注『蘭学階梯』(日本思想大系62『洋学』上、岩波書店、1976年)339頁。
- ⁵ 前田勉『江戸後期の思想空間』(ペリかん社、2009年)74頁。
- ⁶ 大槻玄沢著、佐藤昌介校注『捕影問答』(日本思想大系62『洋学』上、岩波書店、1976年)、421頁。
- ⁷ 大槻玄沢『北辺探事』(大友喜作編『北槎異聞・北邊探事』、北光書房、1944年)、268～269頁。
- ⁸ 大槻『捕影問答』、427頁。
- ⁹ 横山伊徳「江戸期における北方空間認識と外国資料」(石上英一編『歴史と素材』、吉川弘文館、2004年)176～218頁。
- ¹⁰ 大槻『北辺探事』、347頁。

- ¹¹ 大槻『北辺探事』、330～331頁。「口蝦夷地」とは、和人地に近い南部の蝦夷地のことである。「カミシヤーツカ」はユーラシア大陸の北東部にあるロシア領の半島であり、「カムシヤツケ」「カムサスカ」「カムシカツトカ」ともいう。
- ¹² 大槻『北辺探事』、275-276頁。
- ¹³ 吉田忠「蘭学と実学」（源了圓・末中哲夫共編『日中実学史研究』思文閣、1991年）93～110頁。
- ¹⁴ 大槻『蘭訳梯航』上（大槻茂雄刊『磐水存響』乾、1912年）15頁。
- ¹⁵ 秋葉実編『北方史史料集成』1、（北海道出版企画センター、1991年）296～297頁。